

# 考える市民を

## 育てる



### 《 7 》

うに関係しているのか、現実状況を捉え直すこととなる。

この省察に当たって

「学生は問題意識がな

い」という声が課題とし

てよく聞かれる。しかし、

全ての学生は常に既に問

題意識の種を持ってお

り、われわれがそれに気

付いていな

いだけだと

私は考えて

いる。実際、

学校内外で

中・高生に

「私」が暮

らしの中で

嫌だと感じ

ていること

や困ってい

ること、つ

い気になってしまうこと  
は何かと問い、耳を傾け  
れば、必ず何かしらの答  
えが返ってくる。

私的なことのように一

見思われるものも、その

構造に関心を向ければ、

公的なことにつながるこ

とが少なくない。そのよ

うに一人一人にとって当

事者性が高いテーマを大

切にして省察を促せば、

学生は深く考えることを

いとわない。

こうした真摯な思考へ

の誘いは対話を通じて行

われる。対話の最初には、

学生が関心を示し得る情

報を教員が提起し、その

受け止め方を糸口に、各

自のテーマを掘り起こす

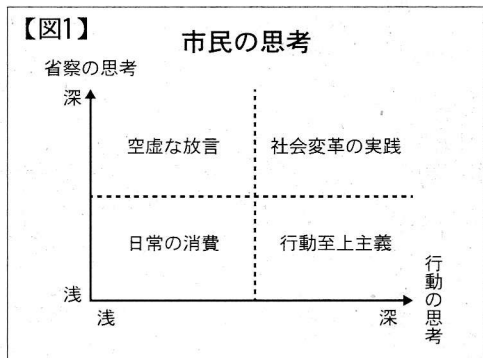
こともあり得るだろう。

①

## シチズンシップ 共育企画代表 川中 大輔

パウロ・フレイレは、言葉には省察と行動の二つの次元があると見た。そして、省察なき行動は行動至上主義的であり、行動なき省察は空虚な放言であると批判し、省察と行動が統合された「実践」の必要性を指摘した。フレイレに倣って、市民の思考を「省察の思考」と「行動の思考」の2軸で示すと、図1のようになる。

シチズンシップ教育における「省察」では、今、私たちの社会で何が起



【図1】 市民の思考  
作成：川中大輔(2015年)、参考文献：パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』(亜紀書房、1979年)

# 問題の構造、自分との関係を省察